

月刊 千葉動力車



生活重と名の イデオロギー攻撃

シリーズ③

日本は

どこの道をとるのか

「生活」論 その 隠された狙い

近頃、しきりと「生活」という言葉が氾濫し、「生活大国」のかけ声が盛んになっている。特にパプルの崩壊と長期不況への突入、自衛隊の海外派兵の情勢と符号し、細川新首相から、民間政治臨調(注・参考)、さらには連合も含め一様に「国際貢献」と「生活重視」が叫ばれている。

まずそのことを決定的に重視する必要がある。「生活」という何の変哲もなく、政治とかイデオロギーとはあまり関係ない言葉が今なぜ強調されているのか? こういう場合「これは何かおかしいぞ」と疑ってみる姿勢が必要ではないだろうか。

細川、小沢、連合!

彼らの主張は、

連立政権初の首相・細川は「地方と日本を変える」として「生活者主義、地方分権の為に福祉、清掃、窓口業務などの行政サービス」の民間委託を行う。「保革対立をこえる第三の道」

連立政権の黒幕・新生党の小沢は「保守革新の枠組みでとらへるのもう古い、これから生産者と生活者の図式でとらへなければならぬ」

連合は、「生活優先の社会の実現、ゆとり、豊かさの実感で生きる生活」「地方分権の実現なしに生活優先の社会は実現できない」

共通している ことは

生産に対して生活を強調し、企業に対し生活、消費者を強調している点である。

一見、企業・会社に対して「批判」しているポーズをとげながら、その返す刀で「使用者も労働者も「生活者」という点では同じ、協調すべきところは協調してやる」というものである。非常に「毒性」をもったイデオロギー攻撃ではないか。

結局のところ、資本家階級の利害のために、労働者人民をたぶらかすデマのイデオロギー。それが、「生活重視」論である。

これは、戦前の一九三五年以降の「階級闘争主義克服と日本の危機の精神による調和」天皇の赤子としての自覚「挙国一致」という手法とあまりにも酷似している。

(注)「民間政治臨調」とは

新生党・羽田、小沢と連合が中心となって与野党議員や財界、マスコミ、労働界、文化人などを巻き込んで作られる。特徴は、機関がほとんどであったが、今回は連合が「労組」の名で自民党と結託し、「野党」を総結集させる「接着剤」となって率先しておしすすめていることである。

「生活者重視論」 二枚舌の 大デスマ

「ゆとり」「豊かさ」といっても、それが日本の労働者の生活を豊かにしようなどとこれっぽち考えていない。その根拠は、八〇年代、日米経済対立の激化のなかでアメリカは日本の産業構造、経済構造の変更をがんがんと迫ってくる。それを契機に日本人の働き過ぎが国際問題になり「過労死」が国際用語になった。こうした矛先をかわすために、「ゆとり」「豊かさ」「生活大国」論が出さねてきた。

外面は「生活重視」を強調しながら日本の現場労働者には不況に基づく労働者への犠牲の転化が吹き荒れているのである。まさに、二枚舌である。

「五五年体制」の崩壊とその反動的突破をかけて登場した細川連立政権は、真正面から改憲を掲げ、社・公・民を抱き込みながら連合を先兵として労働者人民総体を挙国一致体制にからめとろうと全力をあげてきている。その中心問題が「生活」という名のイデオロギー攻撃であることをしつかりと見据え、それとたたかわなければならぬ。

「生活大国」のことで吹き荒れる生活破壊

